

# 「鯨っ子学習」第4学年実践記録

指導者 松下 大介

## 1 はじめに

総合的な学習の時間は、年間70時間設定されている。学習指導要領（文科省、2017：8）には、次のように目標が示されている。

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・発表することができるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

## 2 取組の概要

本校では、総合的な学習の時間のうち15時間を「鯨っ子学習」として設定している。「鯨っ子学習」とは、子どもたちが自身の興味・関心に関わる事柄について自分で見つけた課題を設定し、仮説を立て、調査を通して得られた情報を整理したり分析したりして、まとめて発表する学習を行っている。そして、論理的に結論を導く考え方を身に付け、自己の生き方を考えることを目指す。その際、上記の資質・能力を育成するために、次のような取り組みを全校で共通して行うこととしている。

- ・ 子どもたちが「ア課題の設定」「イ情報の収集」「ウ整理・分析」「エまとめ・表現」という探究的な学びをできるように「鯨っ子学習のすゝめ」を作成する。
- ・ 探究的な学びに耐えうる課題を子どもたちが設定しやすくするように、各教科の学びを通して興味・関心を抱いたものを記録しておく「課題ストック」を日頃から行えるように専用のノートを用意する。
- ・ 教師が課題や仮説の立て方、整理・分析の仕方などを例示する。

総合的な学習の時間の70時間のうち、「鯨っ子学習」を除いた55時間については、学年や学級で内容が異なる（図1）。本学級では、「地域」をテーマに、「調べて発信！佐賀のこと、世界のこと」として、佐賀県の先人や出来事について調査してきた。そのことについても、「⑦課題の設定」「④情報の収集」「⑤整理・分析」「⑥まとめ・表現」という探究的な学びを取り入れて行っている。また、④⑦⑥については、タブレット端末を活用して情報活用能力も身に付けるような学習を行っている。

## 3 取組の実際

### (1) 本学級の取組と考察

取組については、本校の総合部が提示している「鯨っ子学習のイメージ」（次頁図2）を参考にして、「4の3『しゃちっ子学習』の進め方」（次頁図3）を作成し、提示することで、児童が見通しをもって活動することができるようにした。

児童がどのように活動したか、どのような姿が見られたかについては、次のように「ア課題の設定」「イ情報の収集」「ウ整理・分析」「エまとめ・表現」のそれぞれの場面において考察し、更に、児童（本学級回答数：34（無回答1））や保護者などへのアンケートの結果を用いて考察する。

### ア 課題の設定

「鯨っ子学習」を始めるまでに、定期的に教師が声掛けを行ったり夏季休業中の課題として提示したりして「課題ストック」のノートに児童それぞれが知りたいことや調べたいことを記録できるように機会を

月	活動内容等
4	①横断的・総合的な探究課題(②学級担任の教科の特色を生かした探究課題) ①学年テーマ「地域」 ・探究課題「地域の特色と広げつなげたいヒトやモノ」 ・学習事項 「佐賀藩の歴史を伝えよう」 「佐賀城本丸歴史館などの文化財を知らせよう」 「佐賀を築いた七賢人を伝えよう」など
5	②(例)体育科、外国語活動 ・テーマ「オリンピック・パラリンピックから世界を見よう」 ・学習事項 「オリンピック・パラリンピックの歴史」 「世界の国々のオリンピック・パラリンピックの賑わい」 「世界の国々の音楽」など 「世界の使用言語と日本語の違い」 ※情報活用能力の指導と並行
6	夏休み
7	③「鯨っ子学習」 児童の興味・関心に基づく探究課題
8	※他学年へ伝える(3年生、5年生)
9	
10	
11	
12	
1	
2	
3	

(各学年:総合的な学習の時間70時間)

図1 第4学年の総合的な学習の時間の計画

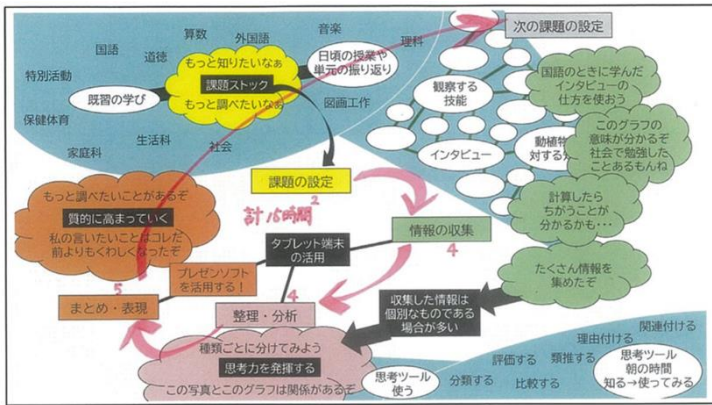


図2 「鯨っ子学習」のイメージ

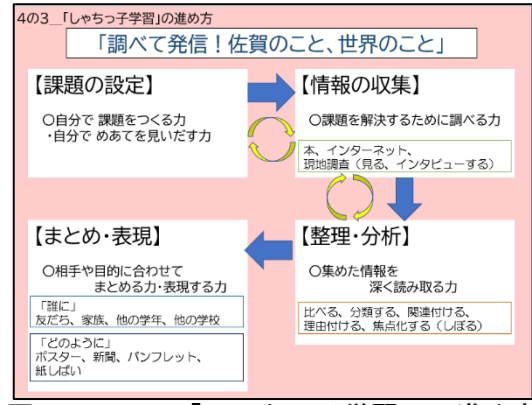


図3 4の3 「しゃちっ子学習」の進め方

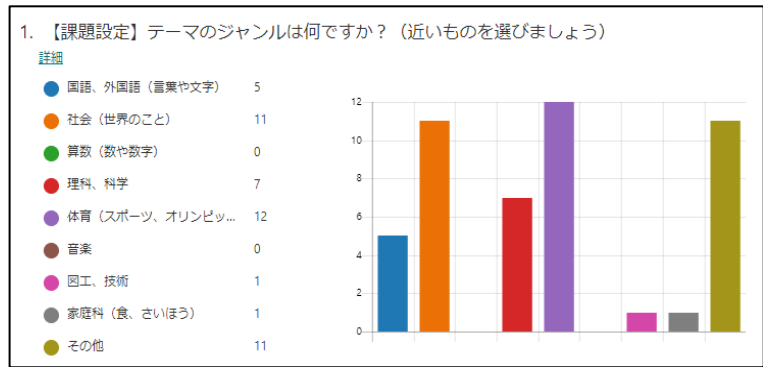
設けた。そして、実際に「鯨っ子学習」を始めるにあたって、本学級の総合的な学習の時間のテーマである「調べて発信！佐賀のこと、世界のこと」を例に、児童には、それぞれに興味・関心をもった探究課題を設定するように促した。その際、教師のプレゼンを例示して、「エ まとめ・表現」における自分の姿をイメージして課題を設定するように声掛けを行った。児童はそのことを踏まえて、これまでの学習や経験から、興味・関心、疑問に感じたことや「課題ストック」を活用して、自分なりに探究課題を設定していた。児童が興味・関心に基づく探究課題の主なものとしては、「ピクトグラムについて」「ウイルス&細菌」「漢字はいくつあるのか」「英単語について」など、いろいろな教科やジャンルにわたっていた。本学級では体育科に関するものや社会科に関するものをテーマとしている児童が多く見られた(図4)。

課題設定の注意点として、すぐ答えが出ず、深く調査したり知ることができたりする課題でなければならないこと、専門的な用語や知識だけを羅列するのではなく誰に対しても分かりやすくまとめることができると予想できるものといった15時間を十分に利用し得る課題かどうかをイメージさせるようにした。児童の中には、いくつかの課題の候補についてイメージマップを作成し、「問い」や調べることを明確にしていた。

課題設定の後、自分の課題に対する「問い」と「仮説」を立てる活動を設定した。ただし、児童の実態から「問い」や「仮説」という捉え(言葉の意味)が曖昧な点とよく分からないという点から、「問い」を国語科で学習したことを想起させて『〇〇は、～だろうか』という疑問の形を作ることとし、「仮説」を「まとめ(結果)の予想」と説明し、児童に論理的なプレゼンテーションの道筋を例示して、発表の姿のイメージをもたせるようにした。ゴールのイメージをもって活動に取り組むことができた結果、35名全員が「問い」を設定でき、32名が「仮説」をまとめの予想として設定することができていた。

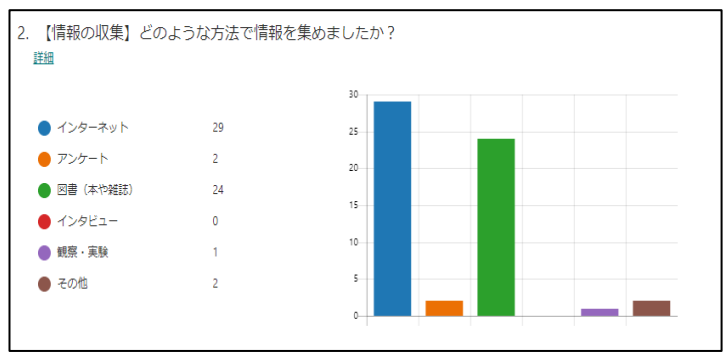
### イ 情報の収集

「どのように情報を収集するか」と尋ねると、「インターネットで調べる(集める)」と答える児童が多かった。そこで、道徳科の情報モラルや情報リテラシーと関連させ、NHK for schoolの「しまった!～情報活用スキルアップ～」の視聴を通して、インターネットの良い点と注意する点について考えたり、情報の正しさを吟味し、取捨選択したりする重要性について確認した。その上で、児童は1つのインターネットの情報だけを用いるのではなく、複数の情報や関連する図書を使っていろいろな角度から情報を見つ



(複数回答可)

図4 テーマのジャンル



(複数回答可)

図5 情報収集の方法

め、課題を解決するためのヒントとしていた。これは、児童へのアンケート（前頁図5）からも確認できる。インターネットを利用した児童は29名、図書を用いた児童は24名であった。その他、テレビ番組や実際に見学をして情報を得た児童もいた。インターネットのみを利用して情報を集めた児童においても、平均3つ以上のサイトから情報を集めていた。このことから、児童は複数の方法や情報を基に課題を解決しようとすることができたと言える。

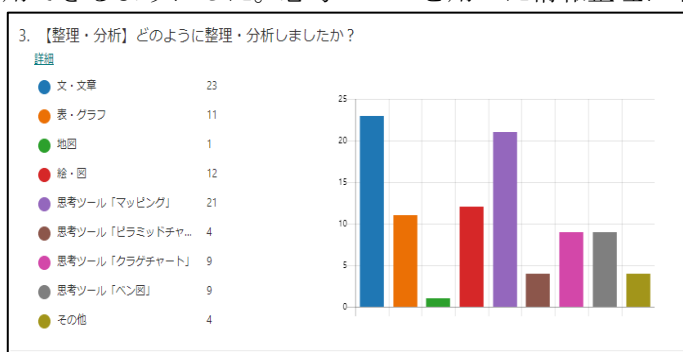
### ウ 整理・分析

情報の整理の方法については、教師が「思考ツール」の型を配布し、自由に活用できるようにした。そして、1ページごとに（1つ整理をするごとに）情報を要約し、課題の解決に繋がるようにした。児童は、思考ツールをある程度理解し、活用することができていたが、曖昧な児童が多かったため、次の2つの手立てをとった。

1つ目は、木曜日の朝の時間に設定されている「思考スキル」の時間を利用して、「思考ツール」の使い方について確認したり、その時のテーマについて児童同士で交流し、他者のいろいろな考えに触れる時間を設定したりした。

2つ目に、前にも述べた、教師が「思考ツール」の型を児童に配布したことも手立ての一つと考える。思考ツールを使いたいが、どう整理したらよいか分からず、調べた情報を長文で羅列したことで整理したと考える児童がいた。そこで、教師が思考ツールをスライドの背景にしたものを児童に配布し、児童が情報の内容やまとめた形に合わせて活用できるようにした。思考ツールを用いた情報整理に取り組む中で、「マッピング」を用いる児童が見られた（21名）。理由を尋ねると、「いろいろな教科で使っているから使いやすいから」という他教科等との関連を理由に挙げている児童が多く見られた。

これらの手立てを講じたことで、図6のように、児童はできるだけいろいろな方法を用いて集めた情報を整理しようと取り組むことができた。そして、「まとめ・表現」へ円滑に向かうことができる児童が多く見られた。



(複数回答可)

図6 情報収集の方法

### エ まとめ・表現

学習の成果を伝える相手として、本学習の導入段階で、「誰に伝えるのか」を考え、「友達」と「保護者」を対象とし、明確に設定して活動を進めることにした。児童は、「どのようにまとめて発表するとよいか」という相手意識と目的意識をもち、自分が興味をもったテーマについて分かってもらうことを常に意識ながら、相手に分かりやすい方法や提示の仕方を考えてまとめていた。

まとめることについて、35名全員がプレゼンテーションソフトを用いて、整理等した情報を使って作成した。プレゼンテーションソフトを用いてまとめる際の留意点として、国語科の「話すこと」や情報リテラシーと関連させて、スライドは発表の補助的なものであることを確認し、文字の大きさや文字数、色の使い方も考えるように声掛けを行った。

表現については、友達や保護者に発表をすることを目標にそれぞれにまとめたことを生かして練習を行った。その際も国語科の「話すこと」で学習したことやこれまでの経験を生かして、児童それぞれに留意点や課題を明確にしていた。ある児童は、「声の大きさ」について考えていた。しかし、発表形態が全体に行うのか全体に行うのかで違うため、一様に声を大きくするのではなく、発表の場面に合わせて大きさを変えようと考えていた。また、他のある児童は、「まとめたことをうまく話せるか不安」という課題をもっていた。そこで、「家で練習して、相手の反応を見ながらまとめたことを指さして発表できるようにしたい」と考えて発表に向かうことができていた。これらのことは、これまで外国語活動で教師が指導したり声を掛けたり、児童同士で確認したりした内容であり、ここでは、外国語活動での学びを生かそうとする姿も見られた。

実際に、保護者に対する発表では、保護者に児童の各グループに入ってもらって行った。そうすることで、児童は良い緊張感の中で発表することができた。そして、児童同士の感想やアドバイスを交流するだけでなく、保護者からも実際に感想やアドバイスをもらうことができ、直接称賛してもらうと同時に、新たな課題を見いだすことができた児童が見られた。また、5年生の発表を聞く機会を得た。ここでは、5年生のまとめ方や発表の仕方を見聞きすることで、自分たちのスライドや発表について振り返ることができた。更に、「自分たちも3年生に発表したい」と「5年生に自分たちの発表を聞いてほし

い」という新たな目的意識が生まれ、発表する必然性をもって学習を継続することができた。しかし、発表の対象によって難しさを感じていたようである（図7）。

以上のことから、他教科等、特に情報リテラシーや言語活動を要する国語科や外国語活動と密に関連させて活動に取り組むようにしたことで、総合的な学習と他教科等と相互に関連させて取り組もうとする姿が見られた。そして、いろいろな相手に発表する場を設定したことで、それぞれに難しさは感じたものの、相手の状況を考えてまとめたことを書き換えたり修正したりして相手に合わせた発表になるように考える姿も見ることができた。

## (2) 質問紙調査の結果と考察

発表後に、保護者と3年生、5年生に対して、本学級の児童の発表について4項目の質問紙調査（表1）を行い、以下のような結果が得られた。数値については、「A（4点）：できた（していた、そうだった）、B（3点）：まあできていた（まあしていた、まあそうだった）、C（2点）：まあできていなかった（まあしていなかった、まあそうとは言えなかった）、D（1点）：できていなかった（していなかった、そう言えなかった）」とした。

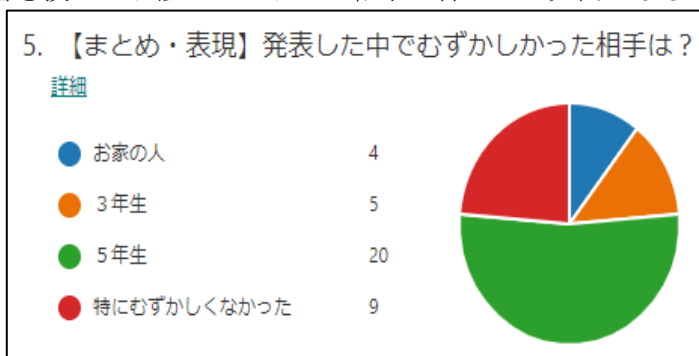


図7 発表対象に対する難しさ

表1 質問紙調査の項目の視点と内容

	視点	内容
1	【課題の設定】【まとめ・表現】	課題とまとめの一貫性について
2	【まとめ・表現】	まとめの明確さ
3	【まとめ・表現】	論理的なプレゼンテーション
4	【整理・分析】	情報の整理

### ① 保護者

児童の発表を踏まえた質問紙の結果（表2）から、どの項目についても約3.0程度の平均点となった。中でも、「課題とまとめの一貫性」についての評価が高かった（3.09点/5点満点）。ただし、「情報の整理」については、2.91点で他の項目より低かった。その理由としては、「インターネットの情報の出どころや、信頼できるデータなのか判断できる力を付けてほしいと思う。情報を正しく読み取る力が必要になってくると思う」や「情報収集は容易だが、正しい情報の見極め方が今後の学びの課題と思う」という保護者の意見から考えられる。そのことから、情報の吟味や情報に対する判断力の不足と捉えることができる。

表2 保護者への質問紙調査の結果（回答数：32）

	項目	A	B	C	D
1	「問い」と「答え」を明確にできたか。	7	22	2	1
2	「答え」を明らかにするための根拠があったか。	5	23	3	1
3	論理的にプレゼンできたか。	6	21	4	1
4	情報を整理できていたか。	6	18	7	1

### ② 3年生

3年生への質問紙調査の結果（次頁表3）から、どの項目についても3.5以上の評価を得た。中でも、保護者と同様に「課題とまとめの一貫性」についての評価が高かった（3.97）。他の項目についても3.7以上あり高い評価を受けた。その理由としては、本学級の児童が「3年生が見やすいプレゼンにしよう」や「今のスライドで3年生は分かるかな？」など3年生という相手を意識して発表や準備に臨むことができたことが高く評価を受けた一因と考えられる。更に、3年生の感想から、「インターネットのサイトの名前や使った本の名前などがしっかり書かれていた」や「しっかりまとめが書かれていたり、ベン図などを使っていたりするところはまねしたいと思った」など、プレゼンのスキル面についての感想も多く見られた。下級生においては、上級生である4年生のスライドを見たり発表を聞いたりしたこ

とで、憧れをもったり参考にしようという思いを見いだすことができたのではないかと考える。

表3 下級生（3年生）への質問紙調査の結果（回答数：34）

	項目	A	B	C	D
1	「パフォーマンス課題」や「答え(まとめ)」がはっきり分かったか。	33	1	0	0
2	説得力のある「答え(まとめ)」にするような理由や情報があったか。	31	3	0	0
3	分かりやすいプレゼンだったか。	32	2	0	0
4	情報が分かりやすく整理することができていたか。	27	7	0	0

### ③ 5年生

5年生への質問紙調査の結果（表4）から、3年生と同様にどの項目についても3.5以上の評価を得た。その中で、「まとめの明確さ」についての評価が高かった（3.85）。5年生の感想の中には、「難しい専門的な言葉も図や写真などを使って分かりやすく説明していた」や「私が使っていない方法や『なるほど』』というようなものがあった」という下級生である4年生のプレゼンの出来を称賛するものが多く見られた。その反面、「早口でよく分からなかった」や、「声が小さくて聞こえなかった」など話す基本的なスキルについての意見も多かった。このことから、スライド作成には力を入れていたが、話すスキルについてはまだ育っていないということを再確認することができた。

表4 上級生（5年生）への質問紙調査の結果（回答数：34）

	項目	A	B	C	D
1	「パフォーマンス課題」や「答え(まとめ)」がはっきり分かったか。	25	9	0	0
2	説得力のある「答え(まとめ)」にするような理由や情報があったか。	29	5	0	0
3	分かりやすいプレゼンだったか。	27	7	0	0
4	情報が分かりやすく整理することができていたか。	25	8	1	0

以上の3つの対象に対する質問紙調査から、「問いとまとめの一貫性」や「問いの明確さ」という、「問い」に関することについてはできていたと判断することができる。一方、「情報の整理」については、評価が他の項目より低かったことから、今後の課題と考えられる。

また、本学級の児童に対しても同じ項目の質問紙調査を行った。その結果（表5）、保護者、5年生、3年生で見られた、「課題とまとめの一貫性」や「論理的なプレゼンテーション」については、比較的できた（前者:3.54, 後:3.57）と感じていた。その反面、「情報の整理」については評価が低かった（3.49）。しかし、それよりも「まとめの明確さ」が3.40となり、できていなかったと感じる児童が多かった。ただし、3点以上であるので、できていなかったというわけではなく、児童の中で他の項目よりもできていなかったと感じている程度であると考えられる。

表5 本学級の児童への質問紙調査の結果（回答数：35）

	項目	A	B	C	D
1	「パフォーマンス課題」を設定して、「答え(まとめ)」とつなげることができたか。	22	10	3	0
2	説得力のある「答え(まとめ)」にするように、理由や情報を言ったり見せたりできたか。	15	19	1	0
3	相手に分かりやすくプレゼンできたか。	22	11	2	0
4	情報をいろいろな方法で集め、整理することができたか。	21	10	4	0

更に、保護者と本学級の児童に『鯨っ子学習』を通して身に付いたと感じる力について調査を行った。それによると、保護者は、次頁図8のように児童の活動から様々な力が付いたと感じている。特に、「分かりやすく説明する（伝える）力」「分かりやすくまとめる（まとめようとする）力」が付いたと感じている。一方、児童は、『鯨っ子学習』を通して次頁図8のような力が付いたと感じている。その中でも、「自分で課題を見つける力」「いろいろな方法で情報を集める力」「分かりやすくまとめる力」が身に付いたと感じている。児童も保護者も共通して「分かりやすくまとめる力」が身に付いたと感じている。

ことが分かる。これは、保護者に対して、児童の発表を聞いて質問紙に回答するようにお願いしたことや、家庭によってはスライドの作成過程を見ていなくて発表のみを聞いて回答したところもあるのではないかと推測される。実際にほとんどの児童のスライドは順序立てて、論理的にまとめられているものが多かったように感じる。

#### 4 まとめ

【課題の設定】 (なし)		
【情報の収集】	・ 情報を収集する力	・ 詳しく調べる力
	・ 複数の方法で調べる力	・ 必要な情報を集める力
【整理・分析】	・ 模倣する力	・ 内容を考慮する力
	・ ぱっと見て分かるように画像化する力	
	・ 課題に対して多角的に分析する力	
	・ 伝わりやすい（見やすい、分かりやすく）スライドを作成する力	
【まとめ・表現】	・ 比較しながらまとめる力	・ 順序立てて説明する力
	・ 分かりやすくまとめる（まとめようとする）力	
	・ プレゼンを作成する力	・ 分かりやすく説明する力
	・ 道具を使って発表する力	・ 相手のことを考えて発表する力
	・ 分かりやすく見せる（伝える）力	
【その他】	・ 創意工夫する力	・ 聞く人に興味をもたせる力
	・ 興味あることに深く追求する力	・ 必要な道具を選択する力

図8 保護者が感じる「児童に身に付いた力」

#### (1) 成果

- ・ 本学級の児童全員（35名）が、それぞれが興味をもったテーマについて「問い」と「仮説」を立て（「課題の設定」）、「情報を収集」して、タブレットPCを使って、集めた情報を整理し（「整理・分析」）、プレゼンを行うことができた（「まとめ・表現」）。
- ・ 発表の対象を数多く設定したことで、相手意識や目的意識を明確にもって学習活動に取り組むことができた（図9）。

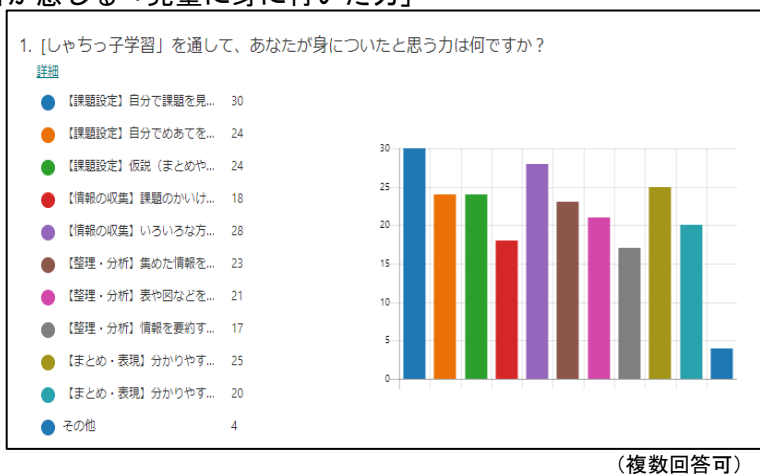


図9 児童自身が感じる「身に付いた力」

#### (2) 課題

- ・ 今回は、「問い」や「仮説」、「まとめ」を児童の実態に合わせて、簡単な語句や表し方に変えた。今後は、「問い」「仮説」「まとめ」の本来の語句の意味に合うようにそれぞれを設定し、系統的な活動や指導ができるように考える必要がある。
- ・ 「情報の整理」については、情報の吟味や情報を正しく判断することについて情報リテラシーや情報モラルの学習を通して、説得力のあるプレゼンテーションになるように手立てを講じる必要がある。
- ・ 言語活動にも目を向けた手立てや活動を設定し、資料の量や質に負けない説得力のある話し方の習得・定着を目指して他教科等でも指導する必要があると考える。

#### 〈参考文献〉

文部科学省、2017『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』